

その9 アメリカオニアザミ

植物体全体を手袋さえ貫通する鋭いトゲで武装し、車より高く伸びる姿は、まさにワルモノ外来植物を体現しているようだ。一方で、4cmほどにもなる紅紫色の花は、ドキッとすると美しくちょっと艶めかしい。「アメリカ」という名がついているが、ヨーロッパ原産のアザミで、アメリカ経由で入ったためこの名がついた。スコットランドではこの花が国花になっている。他国がスコットランドを侵略しようとした際、兵が棘を踏み大声を出したことで危機が分かり独立が守られたという言い伝えがある。英語の花言葉は「independence（独立）」。日本では嫌われ者だが、ところ変われば、特別な愛着が持たれているようだ。（嶋田知英）



スコットランドではこの花が国花になっている。他国がスコットランドを侵略しようとした際、兵が棘を踏み大声を出したことで危機が分かり独立が守られたという言い伝えがある。英語の花言葉は「independence（独立）」。日本では嫌われ者だが、ところ変われば、特別な愛着が持たれているようだ。（嶋田知英）

会員のつぶやき

■ いろいろ生きものネットの活動が4年目を迎えた。1月に緑の森で下草刈りをしながら思った。予想だにできなかったことである。加須低地で生まれ育ち、雇均法の前に社会に出た私が、人間の雑木林で長靴を履いて造林鎌を振るっている。大きなドイツ製の刈払い機を肩にかけ、バリーンバリーンと背丈を超える木まで伐り倒している。始めは特別だった時間が回を重ねいつの間にか日常に組み込まれた。歩く森と相対する森では見えるもの感じるものが格段に違う。しみじみといいなあ、と思った。これからも大事にしたい。（岡安玲子）

■ 今年になり入会させていただきました。

大学時代に調査地として、さいたま緑の森博物館（通称、緑森）で研究をしていたことがきっかけの一つです。当会の名前には「生き物」ではなく「生

その10 ムカデラン

ムカデランは、樹木の幹や枝、岩などに根を張り付かせて生育する着生ランの一種で、埼玉県では極めて希少な種となっています。形はその名のとおりに「ムカデ」に似ています。葉は肉厚で、長さは1cm程度でしょう



か。根も肉厚で、空气中に常に露出しています。もちろん、ランなので花も咲きます。岩などに張り付いて生育しているため、雨や霧といった限られたときにだけしか、根から水分や養分を吸収することができません。そのため、根はスポンジ状の組織に覆われ、水分を吸収しやすいようになっています。また、乾燥したときのために、葉に吸収した水分や養分を貯えています。このように過酷な環境に適応して生きているムカデランは、地味で、年間にほんのわずかしが成長しませんが、その生き様には目を見張るものがあります。（三輪 誠）

きもの」という言葉が使われています。ちょっとした違いですが、これだけで「生きもの」たちに少し寄り添っている気がします。私が研究をしていた緑森は雑木林の萌芽更新を継続的に行っている県内でも珍しい場所です。人が適切に手を加えることで、いろいろな生きものの住処をつくることができます。ぜひ緑森で人と生きものに関わりを感じてみてください。（松本 薫）

いろいろ生きもの通信 No.5

- 発行日 2017年8月1日
- 発行 NPO法人 いろいろ生きものネット埼玉
- 事務局 さいたま市大宮区大門 3-205 ABCビル303
- e-mail iinenet.saitama@gmail.com

いろいろ生きもの通信

NPO法人 いろいろ生きものネット埼玉

オオフサモ除去活動報告書の発行(外来植物は誰が防除するのか?)

このほど、上尾市などを流れる原市沼川での活動の詳細を記したオオフサモ除去実践活動報告書が発行しました。除去作業は当団体にとって初めての経験なので、強烈な印象があります。なるべく詳しく、写真を豊富にわかりやすくまとめました。「特定外来植物の除去」「抽水植物の特徴」「NPO活動としての進め方」「行政との関係」といった観点で、環境活動団体や行政の方々に参考にしていただければ幸いです。

○ 外来植物防除の実態と報告書作成の動機

外来生物法で栽培、輸入などが禁じられる特定外来生物(植物)は現在オオフサモなど16種類。アライグマなど動物の134種類に比べ少なく、被害は動物ほどには目立ちませんが、在来種の駆逐や見慣れた景観を変えてしまうことなど生態系への影響が現実になっています。外来生物法11条では、必要な場合に「主務大臣及び国の関係行政機関の長は防除を行うものとする。」と定め、18条では自治体やその他の者も防除ができるとしています。主務大臣等が責任を負うようにも読めますが、実際には11条に基づく防除は動物中心で被害が大きくなると行われていません。埼玉県でも県や市町が予算をつけて防除を行うことはまれで、比較的小規模の繁茂の場合、防除は一部の地域で市民団体が主に担っているのが実情です。そうした状況の中では標題()内の答えは、「繁茂に気がついた意欲のある団体が行政に通報するとともに、できれば自ら防除を始め、地域や行政を巻き込んでいくのが現実的」ということになるでしょうか。当団体は、ささやかながらその一部を担おうと思っていたところに、県民からの通報に苦慮した県からの打診に答える形で原



市沼川のオオフサモ除去に取り組みました。始めてみると具体的な進め方を記した記録はあまり見つからず、手探りでした。であるなら、なるべく記録を残して、意欲ある人たちの参考に供しようと考えたのです。

○ 内容のあらまし

調査と防除計画の立案、具体的な作業、使用する道具、除去した個体の処分方法、除去の効果の分析、などを記しています。我々の印象では、道具の主役は、レーキ、エンジンポンプ、プラスチックケースですが、胴長靴やスコップ、ロープ、フォーク、一輪車、更には流れ止めのネットなども欠かせません。水辺の作業につき、道具がどうしても多くなります。

○ 特徴(セールスポイント)

作業自体の記述に加え、特定外来生物であるが故に、除去個体の処分に関する河川管理者との調整の実際、現場に繁茂する準絶滅危惧種のコウホネとの競合の関係、定点観測による除去と繁茂の経過分析、現実的な処分方法などを記しました。特に処分方法はやってみて初めてわかったことです。さらには、現場に登場したオオブンの功罪と、てんぷらで食べてみた結果も。

○ 入手方法

送料を負担いただければお送りします。是非メールでお問い合わせください。（脇坂純一）

第3回生きものフォーラム

当会では、生物多様性などの課題について、多くの方々と情報や意見を交換する場として、「生きものフォーラム」を定期的に開催しています。第3回目の開催結果の概要は次のとおりです。

市民による生物調査の新たな可能性 ～観察記録を市民科学へ～

日時 平成29年2月25日(日) 13:30~16:30
会場 浦和コミュニティセンター 第15集会室
参加人数 69名

【プログラム】

■ 事例報告

▽ 半世紀にわたる鳥類のラインセンサス活動

島田 勉 (埼玉県行田市)

▽ 高校生物部のネットワークによる調査活動

矢野光子 (生徒共同グループ「チームアライグマ」事務局)

▽ 環境省モニタリングサイト1000里地調査

大石 章

(NPO法人 天覧山・多峯主山の自然を守る会)

▽ 県のレッドデータブック(動物編)の調査活動

碓井 徹

(NPO法人埼玉県絶滅危惧動物種調査団)

■ 講演

▽ 市民科学を活用したコアジサシ保全活動

東京都市大学環境学部 講師

NPO法人リトルターン・プロジェクト代表

北村 亘

■ 質疑応答・フロアディスカッション

コーディネーター 小峯 昇 (NPO法人いろいろ生きものネット)



事例報告では、個人、高校生グループ、地域NPO、県域NPOという4つの異なる取組について、その特徴や科学的な価値あるいは教育的な価値を高めるための留意点などが紹介されました。

講演では、米国における市民と研究者との連携による市民科学の事例として、膨大な市民の観察結果を学者が貴重な科学的データに取りまとめる取組が紹介されました。そして、我が国の市民科学実践例として、北村氏が取り組む東京沿岸部でのコアジサシ(リトルターン)保全活動が紹介され、市民、学者、行政などが連携することの重要性が語られました。

質疑応答・フロアディスカッションでは、自らが自然観察を行っている方々からの取組紹介や自然観察への子どもたちの関心を高めるための方策などについて活発に意見交換が行われました。また、休み時間等には、展示された6団体のポスターの前でも熱心な情報交流が行われました。

ご参加いただいた皆様、ご講演、展示いただいた方々、ご支援をいただいたサイサン環境保全基金様に心よりお礼を申し上げます。(星野弘志)

【ポスター展示参加団体】

- 桜区のまちづくりを進める会
- NPO法人 和光・緑と湧水の会
- NPO法人 エコシティ志木
- NPO法人 自然観察指導員埼玉
- NPO法人 埼玉県絶滅危惧植物種調査団
- NPO法人 いろいろ生きものネット埼玉



外来性カミキリの探索に行く!

2017年6月18日に、「いろいろ生きものネット埼玉」(脇坂、星野、嶋田(知)、嶋田(京)、三輪、平井)で、草加市内の発生地を訪問し、野中俊文博士(環境部門技術士)に説明していただいたので、その概要を報告する。

クビアカツヤカミキリ(写真1)は体長22-38mm。成虫は艶のある黒色、前胸背板は明赤色で側面に頑丈なとげ状の瘤を一对もつ。触角は黒色で体長と同じかやや長い。オスは小さく触角は長い。マニアには珍品である。学名:Aromia bungii、英名:red-necked longhorn。中国、モンゴル、朝鮮半島、台湾、ベトナムなどに自然分

布。2008年以降欧米にも侵入、植物検疫害虫とされている。

国内では2012年に愛知、2013年に埼玉、2015年に群馬、東京、大阪(以上サクラ)、徳島(サクラ、モモ)、2016年栃木

(クヌギ)で確認。2015年には環境省と農林水産省により「生態系被害防止外来種リスト」に掲載され、関係の知見を集積している。

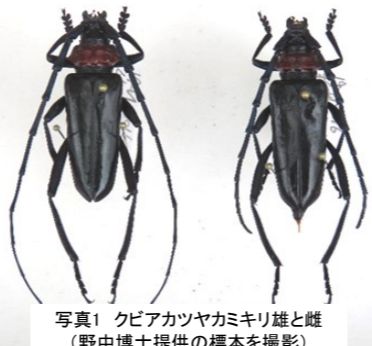


写真1 クビアカツヤカミキリ雄と雌(野中博士提供の標本を撮影)

今回は草加市の葛西用水沿いの桜並木約800m、200樹余りを視察した。サクラの約7%に市役所設置の防除用網カバーがあっ



写真2 サクラの樹幹から出ているフラス

た。成虫は発見できなかったが、樹幹から出ているフラス(幼虫の糞と木屑のペレット)は観察した(写真2)。

幼虫(通称テッポウムシ)は古木の辺材や心材で2~4年過ごし、成虫は6~7月頃に脱出し繁殖する。寿命は2週間以上。2015年の市役所の調査では桜並木の約4%が被害、枯死樹は伐採し若木を植栽した。枯死樹では1樹に幼虫20頭を超えた。フラス

特定外来生物 セアカゴケグモ

常に“毒グモ”という接頭語付きで語られるオーストラリア原産のセアカゴケグモは日本では1995年に大阪府高石市で初めて発見されました。図1、2は私が県立自然の博物館勤務時代に危険生物に関する展示を担当した際、大阪府下の本種の生息地に取材に出かけて行って撮影した写真です。

発見当時は『咬まれると死ぬ可能性もある非常に危険な毒グモ』という報道が先行したため、かなり危険な外来生物



図1

として認知されましたが、我が国ではこれまでに本種に咬まれて死亡した例はありません。

1995年の国内初記録以降は西日本を中心に徐々に分布を拡大していきましたが、2011年の東日本大震災後に生じた東北地方を中心とする東日本への重機、建築資材、中古自動車などの物流の急激な増加に伴って本種の記録地もまたたく間に東進・北上しました。2017年6月現在では、本種が発見されていない都道府県は、青森県・秋田県・長野県の3県に過ぎません。ちなみに埼玉県では2014年に川越市で初めて発見されて以降、これまでに全部で7例の記録があります。

『セアカゴケグモの分布拡散に物流が大きく影

響が出ている樹には薬剤処理先の網をかけ、出てくる成虫が分散しないようにしている(写真3)。



写真3 サクラ樹幹を覆った防除用網カバーと参加者

普通、成虫は見つけ次第捕殺、幹内の幼虫は刺殺する。薬剤は樹木類、果樹類のカミキリムシ類に有効な有機リン剤と生物製剤が利用できる。ほかの有効薬剤を関係機関で探索中という。今回拝聴した内容や既報から推察すると、駆逐は困難であり、国内広域に広がると思える。当面サクラやモモなどでフラスを見たらこのカミキリムシを疑ってみる必要があろう(平井一男)。

響している』のは、本種が好む生息場所と大きな関係があります。クモという一般的な昆虫類などが多い自然環境の中で、植物の枝葉の間に糸で繊細な円形の巣



図2

をつくるイメージがありますが、本種は公園などの側溝の中(図2)やフェンスの支柱の根元といった人工物のすき間に不規則な形の巣をつかって生活し、側溝に落ちたり地表付近を徘徊する虫などをエサにしています。一方、屋外にある重機や建築資材、中古自動車の置き場に目を転じると、そこには防犯灯が設置されていて夜になるとその灯りに誘引されて昆虫が集まり、灯火の下に落ちます。セアカゴケグモは、まさにそういった状況で集まる虫たちをエサにしながら建築資材のすき間や中古自動車のバンパーの裏側などで生活しているようなのです。

そして、それら機材や資材と共に東日本に運ばれ、結果として本種の分布拡大につながったと考えられています。(碓井 徹)